

ちかづいていくと、^{ふじさん}富士山の^{すがた}姿は、どんどんかわる。

AliceKan

とおくから^み見ているだけじゃ、つまらない。
^{ふゆ}冬のある日、^ひぼくは^{ふじさん}富士山にのぼることにした。

きこえるのは、ぼくの歩く^{ある}音^{おと}だけだ。

Alicekan

すこしずつ、すこしずつ、のぼっていく。
ザクッ ザクッ……、キシッ キシッ……、

Alice kan

そしてとうとう、
だれの足あともないところまで、やってきた。
これからさきは、ぼくがはじめて、この雪をふむんだ。



なつ ふじさん じめん あかぐろ ようがん はだ
夏の富士山なら、地面は赤黒い溶岩の肌でおおわれている。

なつ ひと ふじさん
夏には、たくさんの人が富士山にのぼる。

ようがん だいふんか おおむかし おも
むきだしの溶岩が、大噴火した大昔のことを思いださせてくれる。

……そう、富士山はいまもまだ、その内部にマグマをたくわえた、生きた火山なのだ。



ひとびと　むかし　おそ　いの　あが
人々は、昔から、畏れと祈りと崇める
きも　やま
気持ちをもって、この山をみあげてきた。

おも　けっしょう
その思いを結晶させたような祭りがある。

やまなしけん　ふ　じ　よし　だし　よし　だ　ひまつり
山梨県富士吉田市の「吉田の火祭」だ。

なつ　ふ　じ　さん　やま　ひ
夏の富士山の山じまいの日

まいとし　がつ　にち
——毎年8月26日に、

ふつかかん
二日間にわたっておこなわれる。

やま　ひ
「山じまいの日」というのは、

なつ　と　ごんしゃ
夏の登山者たちが、

やま　かみ　かんしゃ　ひ
山の神に感謝する日でもある。

ふ　じ　さん　かたち　みこし
富士山の形の神輿をかつぎ、

よる　か　が　り　び　た
夜には、かがり火を焚く。

たか　お　お　たい　まつ　も
高さ3メートルにもなる大松明が燃え、

い　え　まえ　ひ　た
それぞれの家の前でも火が焚かれる。

べつ　せ　かい　まよ
まるで別の世界に迷いこんだような

ふ　し　ぎ　ふうけい
不思議な風景だ。



だいばくはつ　やま　い
大爆発をくりかえす山とともに生きる

ひとびと　おも　まつ
——人々のそんな思いが、祭りになった。

まつ　み　おも
その祭りを見ながら、ぼくも思う。

い　やま
ぼくはまさに、「生きている山」にのぼっているんだ……と。

